

Artist In Residence Program 2012 Report In NASU

name 新見 藍

genre 陶芸

date 2012.8.27 ~ 10.27

profile

- 2009 文化学院専門課程美術科卒業
グループ展 (東京銀座・アーティストスペース)
新見藍・新見隆二人展「人形たちの庭」
(東京青山・GEMART)
- 2010 グループ展 (東京銀座・アーティストスペース)
新見藍・新見隆二人展「人形たちの庭II」
(東京青山・GEMART)
- 2011 個展「闇の輝き」(東京国分寺・魚しげ別邸)
企画展「手で見ると2011」(東京渋谷・ギャラリー TOM)



▲滞在成果の作品
「無くしてはならぬもの」

人間は恐ろしいほどに愚かで、醜く、浅墓（あさはか）だ。現世での罪は人の心を奪ってしまう。その思いも、どの思いも、早くてもだめ、遅くてもだめ。ただ、静かに静かに、浮かび上がらせなければならない。それが無くしてはならぬもの。見失ってはならぬもの。



「森のピアノ」



「鳴き姫」

新見 藍 ワークショップ報告

アート・ビオトープ那須 吉成太一

10月21日はABN内で横浜マルシェが開催され、晴天で気持ちのよいWS日和でした。今回WSにご参加いただいた地元・室野井小学校の皆様は富田ディレクターに招致頂きました。

開始から和気あいあいと和やかな雰囲気、各自思い思いのイメージで人形をつくり、新見さんとも上手くコミュニケーションがとれ、スムーズに行われました。

WS終了後には、同伴いただいた保護者の方から「学校ではなかなか無いアーティストさんと触れ合いながら制作が出来る今回のようなワークショップはありがたい」と嬉しいコメントを頂きました。近隣の皆様との交流にて、新見さんもAIRの醍醐味を味わうことができたことと思います。

ワークショップを終えて

新見 藍

陶芸のワークショップのため「空気を入れてはだめ」「作っている最中に、乾燥しはじめるとヒビが入る」など、陶芸ならではの制約を、子供たちがどの程度理解してくれ、作ってくれるのか不安でしたが、実際に粘土作業に入ると、苦戦しながら作っていくうちに、やはり大切にしたいと言う思いが強いのか、皆さんきちんと説明通りに作って下さいました。なかには、なかなか説明通りに作って下さらないお子様もいらっしゃり、そのようなお子様の作品は、後で微調整させていただきました。

皆さん、粘土に触れる事は楽しらしく、ただ中を空洞にしなければならぬので、瓶に粘土を巻付けてから作るという難しい作業が終わると、自由に作りたがっていらっしまった感じがします。その前に作りたい人のイメージとして、「絵を描く」「わら半紙で紙人形を作る」といった作業もあったのですが、私自身に進行能力が欠けていたため、あまりその糸がうまく伝わらないまま、終わってしまったと反省しております。

ですが今回私は、はじめて人に教えるという立場にたたせて頂き、また、お客様は小学校の子供たちという形でしたので、準備の段階から、普段考える事のないような思考を思い巡らし、大変勉強になりました。

ART BIOTOP

アーティスト・イン・レジデンス (AIR) プログラム2012

ワークショップ開催

① 9.16 sun

② 10.21 sun

AIR (Artist in Residence) Program 2012
CERAMIC WORKSHOP in Art Biotop NASU

AIRプログラム作家——陶芸

新見 藍

ワークショップ



'I believe, 2011年

陶土で人形を作る——“自由な心と大切な人”

「愛着のある人形」をテーマにして、自分の大切な人だったり、両親だったり、思い入れのある人を、モデルに、陶土などで、制作してもらおうと思います。人間はとても不思議な生き物です。自然にも、空の天気や、雲のようのように、いろいろな色やかたちがあります。

皆さんの中にも自分だけの、自由な、心やかたちが、あります。あまり、外見を気にせず、感じたままに、作ってみましょう。(新見 藍)

開催日 1回目/2012年9月16日(日)

2回目/2012年10月21日(日)

時間 12:30~15:30

対象 小学生以上 親子参加大歓迎

※小学校低学年は保護者同伴をお願いします

持ち物 必要であれば、モデルとなる方の

写真や何か手がかりになるもの

参加費 4,200円(焼成費・税込)

※作品は後日(2~3か月後)引き取り、または発送(別途送料)になります。※定員になり次第締め切りとさせていただきます。

新見 藍 Niimi Ai

東京生まれ

2009 文化学院専門課程美術科卒業

2011 個展「闇の輝き」東京・国分寺「魚しげ別邸」

2009よりグループ展多数参加

○新見 藍さんのアート・ビオトープ那須 滞在期間

2012.8.27—10.27

期間中は、おまにアート・ビオトープ那須の陶芸スタジオで創作活動を行います。お気軽に遊びに来てください。

お問合せ

お申込み

アート・ビオトープ那須 ☎ 0287-78-7833

栃木県那須郡那須町高久乙通上2294-3

www.artbiotop.jp



▲滞在中のワークショップや創作活動等の様子

AIR プログラムを終了して

新見 藍

今回私は陶芸のAIR作家として招いて頂いたのに、あまりにも勉強不足だったため、様々なものが真新しく感じられ、今まで自分の知らなかった「陶芸」の世界を見せてもらいました。まだほんの先端も見えず、技法や知識、陶芸ならではの良さが本当に分かったとは言えません。その場に行き、そこでできる事を見つけ、自分自身で探し出せたとも思っておりません。場にしても人間関係においても、交渉にしても、何一つまともに出来なかったと悔やみ、反省の念でいっぱいです。

ですがいつもと違う場所、環境で作るのに抵抗と有り難みを覚え、年齢の近い工房スタッフさんたちにたくさんの影響を与えてもらいました。陶芸に関しても、いい意味でも悪い意味でも見方が変わりました。自分で材料を選び、触った事のないような土、釉薬の色に魅了され、それを自分の作品に反映させる事がなかなかできず、はがゆく、扱いきれない焼き物の難しさを感じ、学びました。制作においては、自分の作品が悲鳴を上げているのではないかと思うほどに不安がありました。その不安が今回のAIRの最大のキーワードでした。

あらゆる場合においていつも不安と隣合わせで、普段死んでしまっている感覚が、現実という人間的な本当の不安に呼び覚まされた気がしていて、滞在して制作するというのは、本当はそこにあったのだと今実感しています。そんな私の事情、態度、回りの皆さんもとても戸惑っていらっやっやと思います。過ぎていく内に、受け入れられ、また私も少しずつ皆さんを受け入れられたかと思えます。理解と和解は別にあり、それぞれが一つの世界を持っていて、そこを通して色々なものを見てると痛感しました。

これらの思いは、ひとえに、二期リゾートの持っている独特の自然の力、そこに配置され、アイデンティティをくれる家具や建物、料理の総合芸術のおかげです。そしてそこに人という一番大切な核がある中で感じられました。

同時滞在大橋春香さんとの交流は特別なものでした。作家としても人間的にも正反対のようで、とても近い存在のような彼女との出会いや交流は、言葉では言い表せられないほどに特別でした。こうした同時滞在中も、非常に重要な経験でした。完成した作品が、色々あった出来事のどれか一つでも語ってくれていたら幸いです。

様々な経験と出会いを下さり、本当にありがとうございました。



▲滞在成果の作品「倫廻」

倫(りん)は人として守るべき道、人間どうしのきちんと整理された関係。その道が廻り廻って、また何か出会いを生むようにと思いを込めて、「輪廻」を「倫廻」とした。

放出しきれぬ光をガラスのかたまりに込め、両手で持ちきれぬものをいつも身にまとっている。そんな彼女に出会った。作品も彼女自身もとてもナイーブだが、与えてくれるものはとても力強く、暖かい炎のようで、それが、本当の意味での「倫」なのかもしれない。その炎に再び出会えるよう、いつまでも道を見失わないでいたい。

(この作品を作るにあたって、インスピレーションを与えてくれた大橋春香さんに敬意を込めて)

AIR2012 新見 藍によせて

AIR ディレクター 富田勝彦

4年目を迎えましたNPO法人アート・ピオトープ主催「アーティスト・イン・レジデンス2012公募プログラム」。アート・ピオトープ那須に滞在した新見女史は、東京都東村山市出身です。陶芸工房での制作を希望しましたが、所謂、陶芸作家ではありません。これまで、人形を制作しており、素材として陶土を使用し制作してみたいと応募されました。昨年の福島女史同様、オブジェとしての作品制作を陶芸技法で行う……

ここ数年、奈良美智氏や加藤泉氏も立体作品を造っています。当初から平面と立体作品を同時に発表してきた村上隆氏に触発されてのことか、美術界では、時流のようです。特に前者2氏は、陶土を使って製作しています。アトリエ設備の不十分から、自身のイメージに任せない技法で壁に当たっている若い作家たちは大勢います。若手育成のための本プログラムの趣旨はここにもあります。アート・ピオトープ那須の設備は、そんな作家達に修練の場として十分答えてくれるものと自負しています。

さて。モノづくりの基本は“構築力”。これはデッサンから養われる力。所謂“デッサン力”と言われるものです。多くの作家が体力、集中力のある若い頃に何十、何百といったデッサンを描きこの力をつけています。美大受験に必須なのは、上達に時間がかかるため入学前に身につける基礎と考えるからでしょう。この“構築力”をもって素材、工法や技法を変えても自由に表現していけるものと考えます。

新見が自己のイメージを表現すること。陶土の特徴、造形、乾燥、焼成という工法に戸惑いながらの制作は、容易ではありません。素材との格闘は、思った以上に早い時間経過を感じたことでしょう。そんな作家の葛藤を「デッサンが苦手嫌い」という言葉から感じました。しかし、そんな疲弊した心を、那須の大自然が癒してくれたことでしょう。

陶土を使っのての人形は、マイセン人形が有名です。今回の経験から、今後どのような人形を造っていくのでしょうか……



▲滞在成果の作品「I wish」

水々しく、美しい命。それらは、いつしか私たちのあずかり知らぬところへ向かう。ざわめきの中、とめどなく溢れる水のように、こぼれ落ちる涙の数は、希望と相対するものなのだろうか。人の命は短い。どのように生きてゆけばいいのだろうか。



「カルマ」



「守りの子」